

大阪を中心とする関西における読者層，さらには広く震災地以外の地方の読者を狙ったものではないかとも推定される．恐らく，関東地方のこの大震災について新聞で報道されるだけの情報とは別種の震災地のなまの情報を求める欲求に応えるべく制作されたと考えてよいかもしれない．だとすれば，先に検討した「東都大震災過眼録」は読者を予定して制作されたものではなく，ひたすら己の眼で実際に見たものを描こうという情熱で描いた作品と同列に比較することはいささか当を欠くものであるかもしれない．

ここでは、「東都大震災過眼録」に描かれている対象と共通する避難民の状態を描くものを7点を挙げておくことにする（図10～16参照）．

### 3-1. 『大正震災木版画集』

東京本郷湯島切通の画報社から出版された木版画集である．1924年1月から12月まで毎月3点の版画を予約販売するものであるが，その「開版稟告」なるものに刊行の趣意が謳われているので，まず，その刊行の意図を聴いてみることにしたい．

ここで主張されていることは3点ある．一つは地震という自然の脅威に翻弄された罹災者は自然の恩恵に思いを致す余裕はないが，自然の「慈泉」に浴す機会を作ることは芸術家が今為すべきことであり，二つ目には，芸報社は忘れられていた木版画の機運が再び熟し作家が出始めた現状に鑑み，三つ目には民衆的娯楽の木版画でこの大厄災を芸術化する目的を以て刊行するというものである．磯田長秋，西澤笛畝，織田観潮，川崎小虎，田村彩天，桐谷洗鱗の各氏の震災風景の作品を3点ずつ毎月配布するというものである．彫師長島鬼一，摺師田村鐵之助．代金は1回1円50銭，12回分の前金17円である．作品の一欄表は表2にまとめた．第1回頒布は1924年1月15日であった．

磯田長秋（1880-1947，日本画家，帝展委員），西澤笛畝（1889-1965，日本画家，帝展審査員），織田観潮（1889-1961，日展委員），川崎小虎（1886-1977，東京美術学校教授），田村彩天（1889-1933，帝展審査委員），桐谷洗鱗（1877-1932，仏教画家），これらの画家の年齢層から察するに，30代後半～40代に掛けてもっとも油の乗った作家たちであった．

### 3-2. 木版画の画題

版画が対象とした画題を大まかに建物などの倒壊と避難民の生活を描いたものに分けると，29点のうち，20点が建物など構造物の倒壊であり，避難民の生活を描くものは9点となる．ほぼ3分2

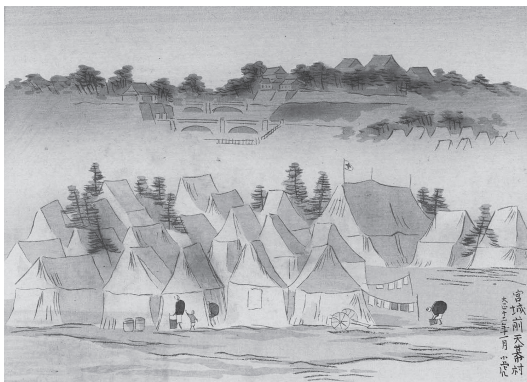


図17 川崎小虎「宮城前天幕村」



図18 磯田長秋「運送馬車(京橋通)」

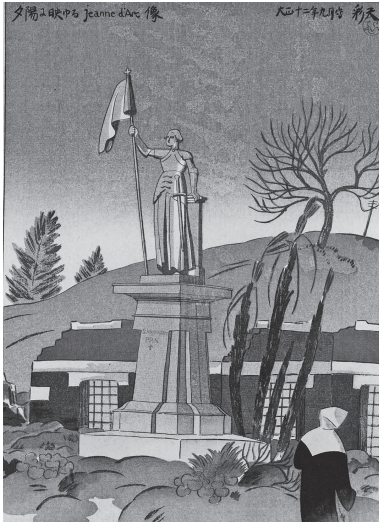


図19 田村彩天「夕陽に映ゆる女神像  
(神田仏英女学校跡)」



図20 桐谷洗麟「西郷の銅像 (上野公園)」

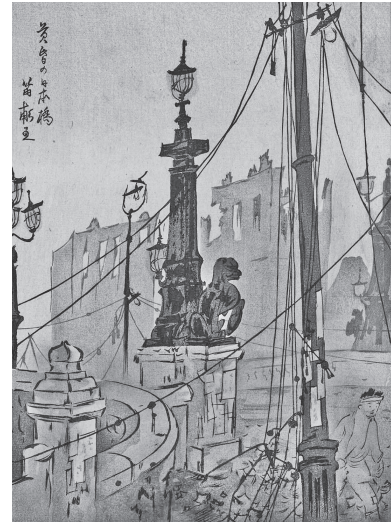


図21 西澤笛畝「黄昏るゝ頃 (日本橋)」

図17～21 『大正震災木版画集』(立命館大学歴史都市防災研究センター蔵)

を占める震災で損壊を受けた建物などは、版画が頒布され始めた時期にはすでに整理され、復興事業が着手され始めていた。この版画集がいつ頃から構想され、画家への依頼がはじめられたのか不明だが、第1回頒布が1924年1月であることから、震災直後ではないにしてもそれほど時を隔てずに構想され、依頼された画家たちは早くから自らの画題の選定については必要な作業が進められていたと考えられる。しかし、かれらの選んだ画題の大半が倒壊した建物群であったことはある種の意味が込められているとみなされるのである。それは、「東都大震災過眼録」との比較において考えられることである。震災の現場を体験するといってもこの大震災ではその内容は多様であったはずである。しかし、この版画集の作家たちは自らも被災した体験を持つ者もいたと思われるが、やはり、依頼された仕事であったから、震災を象徴するような浅草仲見世、吉原遊郭、三越、日本橋、銀座、築地など“震災名所”とも呼ぶべきものを選んでいいる。それに対して、「東都大震災過眼録」の描く震災場面は火災に追われ、住処を求めてさ迷う庶民の群像であった。震災像として絵画に結実されたこの違いは大きいと思われるのである。比較するために、当時写真の対象となった一般に知られた震災被害の、いわば“震災名所”をここに選んで掲げておいた(口絵8～12・図17～21参照)。

#### 4. まとめに換えて

最後に池田遙邨(1895～1988)の「災禍の跡」の制作過程についての考察を踏まえて本稿のまとめとすることにしたい。関東大震災を印象づけるものとして、この「災禍の跡」はすでに著名な作品である。実際にみせていただきたいと思い、倉敷市立美術館に出かけて、400点に近い震災のスケッチが残されたという事実を教えられた。それら多数のスケッチにはほとんど人物が登場しないのに、「災禍の跡」として結実した作品には震災の廃墟のなかに見るものに迫ってくるようにして立つ4人の家族から、震災で受けた打撃の悲しみと怒りをぶつけられるような痛さを感じた。作者遙邨はこの絵を完成させるまで1ケ年を要したということに、震災の作品化に懸けた作者の思いの強さ、芸術というものの具体的な形がここにあるのかとも思えたのである(口絵6参照)。



図22 池田遙邨「災禍の跡」(倉敷市立美術館蔵), 口絵6参照

すでにこの作品、および遙邨の関東大震災の探訪スケッチについては、前田興氏の論稿<sup>(5)</sup>があり、また、遙邨に関する資料集も編まれていて、震災前後のことが知られる。ここではそれらによって、簡単に「災禍の跡」の制作に関する紹介をすることにした<sup>(6)</sup>。

遙邨は15歳(1910年)で大阪の松原三五郎の天彩画塾に入門、20歳で岡山輜重兵第17大隊に入隊、兵役終了後日本画を独学、24歳(1919年)で京都画壇の竹内栖鳳の画塾竹杖会に入門。以下に、震災写生の思い出が実感を以て語られる部分を引用しておきたい<sup>(7)</sup>。

震災の日から20日後に鹿子木孟郎先生に誘われて震災地の写生に同行した。……東京へ着いてからの写生には先生の弟子であった中田、林の両君も参加して四人の一行はなるだけ集団になって出かけた。すでに流言浮説があって戒厳令がしかれた殺伐たる中での写生は、身の危険性を覚悟しておらねばならない、……写生をしている足もとへとつぜん瓦が飛んできてとび散ったりした。……途方にくれている人々のやり場のない怒りが心に喰入るようで、写生半ば黙礼してその場を去った。ある時はけわしい容相で側へきて「なんの為に写生なんかやっているのか——」と今にも暴力を受けそうな気配さえ感じた。何日目かに先生が朝日新聞社報道員と書いた腕章を、社から貰ってこられたのでその後はようやく写生に専念することができた。

鹿子木孟郎(1874~1941)は同じく天彩画塾に属した先輩にあたる。彼に同行して震災地の横浜、東京に入り、約1ヶ月を費やしてスケッチ400点あまりを為したという。ここに語られているような事実は震災地に入ったカメラマンなども同様の経験をしており、実際に殴られたケースもあった<sup>(8)</sup>。ともかく、1ヶ月あまり経っても震災現場は殺気立っていたのである。

さて、池田遙邨の一行は吉原遊郭の遊女の溺死体などで一杯になったという弁天池も訪れている。遙邨の吉原のスケッチは8点ほどに及び、このほか、さまざまな角度から廃墟のさまを描き、また稀ながら避難民の姿を描く1点も残されている。被服廠も訪れたが、「簡単な板囲いの中から濛々と線香の煙が立昇り、あたりは異臭が鼻頭を強くついて長くは居たたまらなかつた。」と記している。上野公園にも行った。震災地として著名になった場所には足を踏み入れ、スケッチを試みているのであ